

# 日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol.19 平成13年度 No.1 平成13年8月27日

編集発行：日本国際理解教育学会事務局

〒589-8585 大阪府大阪狭山市今熊2-1823 帝塚山学院大学国際理解研究所内 TEL & FAX：072-365-8802

Website: <http://www2.ocn.ne.jp/~kokusaig/> E-mail: [kokusaig@oak.ocn.ne.jp](mailto:kokusaig@oak.ocn.ne.jp)

## 新会長・副会長あいさつ

### 充実したステップ期の創出を

会長 米田 伸次

このたび、はからずも天城勲会長のあとを引き継いで会長をお引き受けすることになりました。日本の教育界の重鎮天城先生のおかげに、私にとって会長職はとても荷が重く感じられます。学会発足以来11年間、学会を育て、指導下さった天城先生、また、このたび天城先生とともに副会長を辞される川端末人、中西見両先生に、会員を代表して心からの御礼と感謝のこたえを申し上げます。

ところで、学会が歩んできたこの11年間は、ポスト冷戦期と重なっており、同時にまた、グローバル化が急速に進展していくという時代でもありました。また、この時期には、周知のように、日本の教育界においても、第15期中教審答申を起点に、21世紀をにらんだ教育の改革が提起され、国際理解教育も今まで以上に強調されるようになってきました。

学会としてもこの11年間、こうした「新局面」に対応した国際理解教育のあり方、進め方について、前向きに取り組む、着実に成果をあげてきたのではないかと受け止めています。しかし、ホップからステップの段階に入りつつある11年目の若い学会が、この「新局面」に対応して、まだまだというより早急に取り組まねばならない積みこした課題も、決して少なくはないように思いま

す。

まずその一は、学会のあり方をもう一度問い直してみることです。「新局面」に対応した学会の使命や役割とは何なのかという問い直しを中心に据え、学会の存在意義、あり方、方向性を明確にし、そしてそれを全会員が共有していくということなのです。

その二は、「国際化に対応した教育」として展開されてきた多様な教育の取り組みとの関連で、「新局面」に対応した国際理解教育はどんな役割を荷っていくのか、そのような国際理解教育とはいったい何なのかについても全会員で論議を深めていかねばなりません。

その三は、国際理解教育の研究（者）と実践（者）の連携、相互啓発をどう進めていくのかということなのです。学会は、発足当初から、研究者だけでなく、学校・社会教育関係者、さらにはNGO・NPO関係者等も含めた幅広い層を包含した新しい学会づくりをめざしてきました。しかし、連携や相互啓発はことばとして語られてはきましたが、深まりを見せてはこなかったように思います。果たして国際理解教育に研究と実践の明確な線引きが存在するのかという問いかけも含めて、連携、相互啓発を深めつつ、国際理解教育研究の水準をいかに高めていくのかという論議と実践を全会員で進めていかねばなりません。

無論、学会の抱える課題は決してこれに尽きるものではありません。大切なことは、会員が積極的に問題を提起し、論議に参加していく場、機会がどれだけ確保され

## 目次

新会長・副会長あいさつ	1
顧問からのメッセージ	2
国際理解教育学会第11回大会報告	4
第11回大会参加者感想	6
大学院生研究報告	9
2001年(平成13年)度 総会報告	10
2000年(平成12年)度 事業報告	10
2000年(平成12年)度 会計決算報告	11

2001年(平成13年)度 役員・委員会一覧	12
2001年(平成13年)度 事業計画	13
各委員会の事業計画	13
2001年(平成13年)度 収支予算書	16
理事会・常任理事会報告	17
新入会員・退会会員及び会員異動	20
お知らせ・寄贈図書・学会後援名儀	23

るのかということ、そして全会員がこれらの課題を共有し、解決に向けて話し合っていくことではないかと思えます。このことこそが会員を拡大し学会を発展させていく基本的な条件ではないでしょうか。

幸い、多田孝志副会長という強力なパートナーを得、また意欲いっばいの理事によって理事会が構成されているということは、学会のこれからに明るい希望を抱かせてくれています。

学会に、実りのあるステップ期を創出していくよう、会員の皆様にも一層積極的なご参加をどうかよろしくお願い申し上げます。

(帝塚山学院大学国際理解研究所)

### 拡大・充実期への胎動

副会長 多田孝志

日本国際理解教育学会は、拡大・充実期にむかおうとしているように思えてならない。本学会は天城勲前会長、川端末人、中西晃、星村平和先生をはじめ、日本の教育界をリードする諸先生によって、地球時代の教育の理論的・実践的な地平を切り拓く研究を推進してきた。21世紀をむかえ、そうした優れた先達の培った基盤を継承しつつ、新たな展開を希求する時期となったと感じる。

学会の新たなスタートに思いを馳せるとき、最近印象的であった優れた研究を想起する。そのひとつは、高麗大学の李漢燮先生による「19世紀末以降の日韓両語の語彙交流について」の研究である。李先生の研究によれば、1881年朝鮮は近代国家への道を歩む日本の状況を視察するため「紳士遊覧団」を派遣した。遊覧団は62名により構成され、12の班に別れて、日本の施設・制度を視察した。この日本滞在中に軍事、法律、経済、交通、税関、教育など各分野で、多くの新文明語彙を収集し帰国したという。私が最も興味を引かれたのは教育に関する語彙であった。李先生の研究によれば、学校、学生、教師、

師範学校など多数の新文明語彙が朝鮮にもちかえられたとのことである。

浅学にしてこの事実を知らなかった私は、驚き、翌日、韓国からの留学生に問うてみた。すると学校(ハッキョウ)学生(ハクセン)、教師(キョウウ)と読み方は異なっても、これらの漢字は現在もそのまま使用されていると聞かされた。

「紳士遊覧団」に関する研究を知らせてくれたのは、勤務校の同僚の陳力衛先生であった。陳先生は、日本の古典さえ自在に読破する「西洋文化と新漢語」に関する優れた研究者である。その陳先生によれば、明治期の日本の新漢語は、A 中国語から直接借りたもの(地球、銀行、電気等)、B 中国の古典語を用いて外来概念をあてたもの(文化、観念、文明等) C 日本人独自の漢字意識で外来概念をあてはめたもの(哲学、喜劇、美学等)に大別されるという。

明治期の日本人が苦心し、創り出した漢語を韓国の若者が使っている、その日本人は中国人の智慧の所産を活用し、新漢語を創造した、わたしは二つの研究の成果に新鮮な感動を覚えた。

この二つの研究は、多様な分野の研究者・実践者との連携・ネットワーク形成の必要、国際理解・歴史認識に関わる学習材開発の重要性、精緻な理論的研究・豊かな教養に支えられた実践の推進等々、拡大・充実を目指す本学会の今後の方向にいくつかの示唆を与えてくれたように思えた。

本稿では、周辺で出会った研究を例示した。しかし、全国各地には、数多くの優れた研究・実践が日々なされているに違いない。そうした成果を共有し、広げていくことにこそ、学会の存在意義があるとも考えた。

米田伸次新会長のもと、会員各位が、自分たち自身がつくる学会として積極的に提言し、参加し、成果を共有できる、そうした真摯な中にも自由闊達な雰囲気のみちた学会づくりに、少しでもお役にたちたいと願っている。

(目白大学)

### 顧問からのメッセージ

#### 学会のさらなる発展を

前会長 天城 勲

学会の第11回研究大会も6月9日・10日筑波大学で盛会裡に終了することができました。11年前ただ年長の故をもって会長に推され、不慣れのまま未知の大海に乗り出した思いでしたが、学会員の皆様の熱意とご支援により特段の事故もなく無事に任を終えることが出来たことについて会員の皆様に深く感謝申し上げます。その間それまでになかった多くの優秀な知己を得ることが出来ました。私の生涯の貴重な宝物です。

1974年のユネスコ「国際理解教育」勧告は私が国際理解教育に直接に関わった出来ごとでした。この勧告作成

のための政府会議に私は日本代表として出席しました。いろんな事情が重なって準備不足のせいもありましたが会議の内容と議論にはびっくりしました。開発の10年を経て多くの新興独立国が加盟していましたし、世界的に冷戦構造が進んでいました。このように大きく変わった環境の変化とそれまでのユネスコをめぐる多くの貴重な経験の集大成が会議の内容と議論でした。勧告の内容は皆さんご存知の通りですが率直に言って盛り沢山で全体の整合性に欠け一貫した理論があいまいなきらいがあります。いづれにしてもこの勧告後、ここに盛り込まれた多様な課題が夫々突出して一人歩きしている感があります。平和、人権、環境、開発、異文化、グローバル等々と銘うった教育が展開されているなかで国際理解教育の

本旨があいまいになってきているのではないかと疑われます。そして我が国というよりむしろ文部省やユネスコ国内委員会のこの勧告に対する反応はきわめて消極的でした。私は1974年のユネスコ勧告については、さきに述べましたように直接に係わりをもっただけに或る意味では批判的ではありますが、それでも国際理解教育に関する国際的公文書としての重要性は今日もお失っていないと思います。

この学会は約10年前発足し、会員数も500名程のまだ小さな学会ですが会員は大学の研究者だけではなく小・中・高の学校教員、行政官、民間関係の実践者を含み、理論と実践の両面から我が国における国際理解教育の発展に努力しているのが特徴だと思います。

現在社会のあらゆる分野でグローバル化が進んでいますが反面冷戦構造崩壊後には民族、宗教や経済を主因とする一種のナショナリズムが抬頭しています。民族や国民など人々の集団のアイデンティティのためのナショナリズムは自然発生的なもので非難すべきものではないでしょう。ただ利己的、排他的、攻撃的に作用することが問題です。最近、世界に通用し、さらに貢献する日本人を育成するための教育が説かれています。グローバル化のなかでその意義を深く考えていくことがこれからの国際理解教育で最も強く求められています。

全キャリアを国際理解教育に捧げてこられた米田伸次先生が、新しく学会長に選ばれました。私は心から歓迎するとともに、新会長の下で今後学会の一層の発展を心から祈念しております。

### 感謝と新しい体制への期待をこめて

前副会長 川端 末人

私のように浅才な者が二期六年間を副会長として会務の運営にあたり、恙なく任を終えられたことは、偏に役員の方々や一般の学会員の温かいご支援の賜物と心から深く感謝しています。

私たちの学会は国際理解教育の研究と実践にたずさわる者が、研究と実践とを通じ互に協力し合って我が国の国際理解教育の発展に寄与することを目的とし、事実この点は類似の学会に比べて誇ることのできる特色となってきている。しかし、国際理解教育研究の学術的水準を高め、またその教育実践が学校現場での主導的レベルに達しているかを問うならば、研究と実践の協力の内実を改めて検討する必要があると考えられる。

そのことに関連しこれまでの学会活動から改善されるべき主要な点を具体的に提言したい。

まず、年次大会での枢要な位置を占める特定課題研究であるが、過去三年間の実態を冷静に吟味し根本的に再検討されねばならない。特定課題研究というからには、パネリストたちが文献を渉猟して提言のための理論構築するための十分な時間的余裕をもってテーマが提示される必要がある。また、テーマは学会員の大半が納得しう

る透徹した問題意識に裏付けられたものとして提起される必要がある。

次に学会紀要であるが、引用文献も脚注もまったく無いものが研究論文として掲載されていること、毎号誤植がかなり散見されること、書評に批判ないし問題点の指摘がほとんど見受けられないことなど、学術誌としての価値を貶めるものであるから、新しい体制の下で改善に向けて再検討されることを、切に期待したい。

### 基礎づくりから発展に向けて

前副会長 中西 晃

平成10年度の年次総会で副会長に選出され、同時に前事務局である日本国際交流振興会の安藤益代理理事より学会事務局を引継ぎ、3年間にわたり担当してきました。本年をもってその大役も恙無く終了しましたが、これも会員の皆様をはじめ、学会役員の方々のご協力及びご支援の賜で、深く感謝申し上げます。その一方で不慣れのため、皆様には数々のご不便をおかけしたり、また叱正を頂戴したことを深くお詫び申し上げます。

振り返りますと、当学会は1991(平成3)年に産声をあげましたが、私もその設立準備委員会の一員として関わらせていただき、爾来10年間天城会長や諸先生方とともに、及ばずながら学会の発展のために努力してまいりました。

発足当時は日本国内の国際化が進展し、帰国子女教育のほかに外国人子女教育が浮上し、「異文化との共生」がキーワードとなって、学校教育でも大きな課題となりました。このような時に学会が発足したのは誠に機を得たもので、研究者と学校教育関係者が一体となって国際理解教育に取りくまなければならない時代で、その意味において学会の存在と役割は大きかったと思います。この間、年次大会の他に、紀要刊行、教育現場の先生方とともにした実践研究会、アジア地域を中心に8カ国から迎えた研究者と議論したアジア太平洋地域国際理解教育会議、ヨーロッパやアジア地域へのスタディ・ツアー、科学研究費の補助金による国際理解教育の理論と実践的指針の構築を目指した研究会など、着々と成果を挙げてきたように思います。しかしながら、国際理解教育の課題解決と実践課題は枚挙にいとまがなく、天城会長の10年間の時代は学会の基礎作りをした段階であると思います。

21世紀という節目からの米田新会長を中心とした新たな活動は、学会の発展期と位置付けております。今後の学会の更なる飛躍を祈念いたします。

日本国際理解教育学会第11回大会報告

第11回大会実行委員長 嶺井 明子

2001年6月9日(土)、10日(日)の両日、230名もの多数の会員、非会員の方々に参加いただき、筑波大学を会場として第11回大会を無事に開催する事ができました。ありがとうございました。大会実行委員長を務めるのは初めての事であり、行き届かぬ所が多々あり、ご不便をおかけしたものと存じます。

自由研究発表は38件あり、第1日目は4会場、第2日目は5会場に分かれて、充実した発表と熱心な討議が展開されたと報告を受けております。

第1日目の午後には「国際理解教育におけるメディアリテラシー」というテーマで公開シンポジウムが行われました。「メディアリテラシー」という言葉自体、まだ市民権を得た概念とは言えませんが、「情報化」が急速に教室に浸透してきている状況の中で、避けては通れぬ重要な課題と受け止めテーマに据えました。パネラーに4氏を迎えました。吉田浩氏からは小学校での実践、滝多賀

雄氏からは中学校での実践、市川克美氏からは放送番組制作の実践、小笠原善康氏からは教材制作、情報教育研究の立場から、それぞれ問題提起がなされ、佐藤郡衛氏のコーディネーターのもとで興味深い議論が展開されました。

第2日目の午後には特定課題研究「地球時代における「国」と人々—授業づくりの課題—」が行われました。司会、新井郁男、コーディネーター、藤原孝章のもとで、後藤泰博、金子哲也、高野剛彦の各氏から課題提起がなされ、指定討論者として天城勲、二谷貞夫の各氏が加わりました。今年は継続研究3年目にあたり、多くの参加者を得て、熱心な討議がなされました。

懇親会にも多数の方々に参加いただき、楽しい語らいの一時をもつことが出来ました。

最後になりましたが、大会の司会や総会の運営に関わって下さった理事や会員の方々に改めて感謝申し上げます。

本大会のプログラムは以下のようです。

(筑波大学)

第11回大会プログラム  
<6月9日(土) 午前の部>

自由研究発表Ⅰ 司会：谷川彰英(筑波大学)・八木佳子

(東京都品川区立鈴が森小学校)

1. 人・地域・世界をつなぐ国際理解教育—小学校三年の実践— 太田 満(奈良教育大学院生)
2. 「総合的な学習の時間」における国際理解単元の設定をめぐる課題—ウェブによるテーマ設定を中心に— 藤原孝章(富山大学)
3. 博物館との連携を生かしたハワイ日系移民に関する単元開発と実践—グローバル教育と多文化教育の結合可能性— 森茂岳雄(中央大学) 中山京子(東京学芸大学附属世田谷小学校)

自由研究発表Ⅱ 司会：井上正幸(文部科学省)

安藤益代(日本国際交流振興会)

1. 日本の学校と朝鮮学校の交流の現状と課題 木之下研悟(元筑波大学院生)
2. ネパールの小学校と手をつなぐ—国連・政府の協力で姉妹校提携—東京都江戸川区立第六葛西小学校について— 辻井清吾(トリブヴァン大学)
3. 国際感覚から国際感性へ—姉妹都市交流の一考察— 勝俣得男(静岡県御殿場市立南中学校)
4. 学校教育プログラムの多様化と国際理解教育—茗溪学園高等学校の取り組み— 梅ディ・アーマディヤール(茗溪学園国際教育部)

自由研究発表Ⅲ 司会：大津和子(北海道教育大学)

中村幸士郎(山口大学)

1. 国際協力としての日本語教師からボランティアポ

- ランティアとは?— 大杉千恵子(名古屋大学院生)
2. 21世紀に語り継ぐ戦争体験—「英国人元POW(戦争捕虜)」からの聞き取りを通じて考える歴史的課題の継承— 早川則男(中村高等学校)
3. 日本語の理解と活用を図る支援のあり方へのアプローチ—日本の文化理解と日常の言語生活とのサイクルを基盤とした指導を通して— 原恵美子(茨城県つくば市立二の宮小学校)
4. 地球子ども教室における日本語学習空間—テキストからコンテキストを重視したカリキュラムへ— 宇土泰寛(東京都港区立三光小学校)、玉井裕子(横浜・児童生徒の為の日本語教育研究会)、長谷川朋美(横浜国立大学院生)

自由研究発表Ⅳ 司会：田淵五十生(奈良教育大学)

野沢聡子(教育総合企画)

1. アメリカ中西部における「日本理解」のためのクラス運営—ウイスコンシン大学での試み (“Understanding Japan.” Spring 1999) — 横田睦子(大阪大学院生)
2. 異文化との出会いと自己形成(2)—望ましいセルフエスティーム形成の視点から— 小嶋祐一郎(広島県廿日市市立野坂中学校)
3. 中国帰国生のアイデンティティ—大阪府の高校生への聞き取りから— 森川与志夫(奈良県立二階堂高等学校)
4. 「教育困難校」から見える日本社会と国際理解教育の

役割—“途絶”と向き合う学校文化の中で—  
伊井直比呂（大阪府立北淀高等学校）、甲山和美（大

阪府立北淀高等学校）、内田千秋（大阪府立北淀高等  
学校）、大阪府立北淀高等学校教職員（校長 萩原善慧）

<6月9日（土）午後の部>

**公開シンポジウム**

全体テーマ：「国際理解教育におけるメディアリテラシー」  
コーディネーター：佐藤郡衛（東京学芸大学海外子女教育セン  
ター）、嶺井明子（筑波大学）  
パネラー：

吉田浩（茨城県つくば市立竹園東小学校）  
「ネットワークを活用した授業実践—つくば市内の小・  
中学校での取り組み—」

滝 多賀雄（神奈川県川崎市立長沢中学校）  
「情報収集にすばやいメディアの活用—日常の授業での中  
学生にできる活用—」

市川克美（NHK中部ブレンズ制作部長）  
「メディアリテラシーで鍛える国際理解の力」  
小笠原善康（日本大学）  
「一次メディアリテラシーを高める経験教育をめざして」

<6月10日（日）午前の部>

**自由研究発表V** 司会：二谷貞夫（上越教育大学）  
多田孝志（目白大学）

1. 総合的な学習による国際理解—ブラジル人の友達と仲良しの学校にしよう— 小野山文子（埼玉県さいたま市立八幡小学校）
2. 総合的な学習における国際理解教育—グローバルセミナーの実践から— 釜田 聡（上越教育大学学校教育学部附属中学校）
3. 生徒会専門委員会活動と国際理解教育—JRC委員会の活動例より— 中池さな恵（栃木県足利市立毛野中学校）
4. 国際化に対応する「大阪らしさ」を生かした総合的な学習—コンセプトとその実践的展開— 宋英子（大阪市教育センター）
5. 身近なものから世界が見える—「ケータイ」の授業実践から— 井ノ口貴史（大阪府立加納高等学校）

**自由研究発表VI** 司会：二宮皓（広島大学）・片山聡彦  
（茨城大学附属中学校）

1. ドイツの学校における多文化「共生」の取り組み—トルコ人生徒の文化理解に商店をあてて— 中山あおい（筑波大学院生）
2. 国際理解教育と平和研究—授業の中で私が学生から学んだもの— 寺島隆吉（岐阜大学）
3. 国民国家と「地域」—高校世界史学習での「地域」概念の意義と方法をめぐって— 田尻信市（筑波大学附属高等学校）
4. 国際交流事業プログラミングの指針—「国際青年の村」・「世界青年の船」等の経験をもとに— 本間正人（ラーノロジー・ジャパン代表）
5. 実践力を育てる国際理解教育に関する考察—「総合的な学習の時間」における一つの実践をもとに— 柳沼勉（埼玉県さいたま市立上木崎小学校）

**自由研究発表VII** 司会：天野正治（聖徳大学）・風巻浩  
（神奈川県立川崎南高等学校）

1. イギリス（コーウープレイン市内）における日本語指導—現地の小・中・高において— 山中忠雄（東京都調布日本語ボランティアの会）
2. 異文化適応を越える日本語教育をめざして—中学校夜間学級での実践より— 神谷純子（一橋大学院生）
3. 日本語教室から見た外国人子女教育の現状と課題—北関東地域における日系外国人子女教育の問題— 平岡雅美（茨城県結城市立結城小学校）
4. 日本における日系ブラジル人児童・生徒の就学状況—群馬県大泉町での実態調査を中心に— 岩本廣美（奈良教育大学）、森川与志夫（奈良県立二階堂高等学校）、光長功人（奈良教育大学院生）、神野浩（奈良教育大学院生（明星高等学校）

**自由研究発表VIII** 司会：米田伸次（帝塚山学院大学）  
渡部淳（国際基督教大学高等学校）

1. アンチバイアス教育の視点を導入した国際理解教育—三重県上野市立H小学校の実践を事例として— 山田千明（共栄学園短期大学）
2. 高校における「国際理解講座」としての留学生交流実践報告—外部留学生講師との連携の試みを中心として— 服部圭子（大阪大学院生）
3. 国際理解の授業の充実のための試行—教師の交換授業を通して— 植木節子（千葉大学）
4. 批判的合理主義による国際理解教育—方法論の構想とその—考察— 犬飼俊明（同志社大学院生）
5. 国際理解教育の歩みと今後の課題—実践の理論家と理論の実践かを求めて— 田淵五十生（奈良教育大学）

**自由研究発表IX** 司会：中西晃（目白大学短期大学部）

- 安保尚子（東京都立町田高等学校）
1. JTAの参加動機に見られる特性—若者の海外志向

- の背景を探る— 佐藤昭治 (一橋大学院生)
2. 海外就学旅行の地域性 羽成佑子 (筑波大学大学院生)
3. 言語習得理論から見た小学校英語教育 服部孝彦

- (大妻女子大学)
4. フィリピンから学ぶ英語教師のためのスタディーツアー —ノンフォーマル・フォーマル教育を訪ねて— 浅川和也 (東海学園大学)、福田紀子 (FARM)

<6月10日(日) 午後の部>

**特定課題研究**

テーマ: 『地球時代における「国」と人々  
—授業づくりの課題—』

司会: 新井郁男 (愛知学院大学)

コーディネーター: 藤原孝章 (富山大学)

課題提起者1: 後藤泰博 (東京都目黒区立東根小学校)

「小学校中学年における近隣諸国の学習」

課題提起者2: 金子哲也 (東京都教職員研修センター)

「中学校におけるベルギーの学習」

課題提起者3: 高野剛彦 (兵庫県立六甲アイランド高校)

「高等学校における地域の学習—単元グローバルシティ神戸」

指定討論者: 天城勲 (高等教育研究所)、二谷貞夫 (上越教育大学)

**第11回大会参加者感想**

◇第11回大会に参加して

下村 智子 (広島大学大学院)

今回、初めて国際理解教育学会へ参加させていただきました。第11回大会は、参加していらっしゃる方々の多様性が、自由研究発表における活発な議論や懇親会における和やかな雰囲気など、大会全体に反映されているように実感した大会でした。

大会全体を通して感じたことの一つとして、グローバル化する社会におけるセルフ・エスティームやアイデンティティが、重要な課題の一つとして議論されていたことが挙げられます。特に、国際交流活動における留学生のかかわり方に関しては、著者も興味があるところであったので、非常に勉強になりました。また、国際理解教育活動、国際交流活動といったものが、どのようにして継続されていくべきなのか、という点も課題となっていることを実感いたしました。

また、本大会において、様々な研究発表の場で「共生」について議論されていたことも印象に残っています。大会中、何をもって「共生」というのか、私自身、考えさせられる場面が非常に多くありましたが、特定課題研究において天城先生がされました、「共生」を実現するためには、自己理解が不可欠である、という、二者の関連に関する御指摘には、多くの示唆を得るものがありました。

このように、本大会においては、グローバル化する社会における「アイデンティティ」のあり方と「共生」が重要な課題の一つとなっており、これらの理念がどのように実践と繋がりをもち、という点に関しても、大きな課題となっていることを再認識いたしました。今大会に参加して、多くの示唆を得ることができました。有難うございました。

来大会は、私の所属します広島大学で開催させていた

だくこととなりました。よい大会になりますよう、お手伝いしたいと思っています。交通の便等、皆様にご不便をおかけすることもあるかと存じますが、皆様の参加をお待ちしております。

◇自由研究発表に参加して

中野 美紀恵 (茨城県教育庁義務教育課)

児童生徒の教育に携わっている関係から、これからの国際理解教育を考える資料を得たいという思いで自由研究発表Ⅲに参加しましたので、その視点からの感想を述べさせていただきます。

4組の発表者が、大学院生、高等学校教諭、小学校教諭、日本語教育研究会の方と様々な立場で国際理解教育の推進をされているので、その発表内容が多岐にわたり興味深いものが数多くありました。

大杉千恵子氏による「国際協力としての日本語教師からボランティア～ボランティアとは?～」は、ハンガリーにおける日本語教育の現状の一端を紹介すると同時に「ボランティア」とは何か、また国際協力の果たす役割についての考察でした。それぞれ異なる身分でハンガリーに滞在する4人の日本語教師の報酬、勤務状況等を詳細に調査し考察を加えての発表で、「ボランティアとは何か?」を考える糸口になる貴重な資料でした。発表後の質問や参考意見等にも出ていましたが、それぞれ異なる身分でハンガリーに滞在する4人の日本語教師側の情報だけに限られていたので、日本語を学習している子供側からの考察も必要だと感じました。教える教師側だけでなく学び手の子供側からの情報も収集し比較することによって、さらに深まりのある研究になることと思います。

早川則男氏による「21世紀に語り継ぐ戦争体験～

『英国人元POW（戦争捕虜）』からの聞き取りを通じて考える歴史的課題の継承～』は、戦争責任をめぐる内外の現状を踏まえ歴史学習の目指すべき方向性を探った研究内容でした。1995年8月のVJ Day反日キャンペーンに関しては、当時の政府や外務省はそれを十分予測できたはずだという意見も出ましたが、世界の状況を瞬時に正しくとらえることは容易なことではないことを、今までの歴史が物語っていますし、これからもそうであろうと思われます。その難しい歴史学習に、英国人元POW（戦争捕虜）からの聞き取りを導入し、平和学習セミナーを実施している成果を、生徒の感想から分析し、自分自身の問題として課題に迫ろうとする歴史学習の在り方と今後の取り組みを提言していました。

原恵美子氏による「日本語の理解と活用を図る支援のあり方へのアプローチ～日本の文化理解と日常の言語生活とのリサイクルを基盤とした指導を通して～」は、初期日本語指導の在り方を丁寧に探った研究内容であり、宇土泰寛氏、玉井裕子氏、長谷川朋美氏による「地球子供教室における日本語学習空間～テキストからコンテキストを重視したカリキュラムへ～」は、担当者、ボランティアスタッフ（日本語指導を専門とする大学院生）、子供が共に作り出す学びの空間を提言した研究内容で大変興味深いものでした。しかし、現在の担当者やボランティアスタッフ等が入れ替わった場合、その学校での子供の日本語指導はいったいどうなるのか等の疑問も投げかけられ、現実問題としての課題が見えてきました。

これからの国際理解教育の在り方を考える多くの資料を得た有意義な会となりましたことを感謝いたします。ありがとうございました。

#### ◇自由研究発表に参加して

石川 一喜（東和大学国際教育研究所）

第1会場での自由研究発表Iのみに参加していたため、統括的に且つ事細かな感想を述べることはできないが、発表抄録を拝見する限り、国際理解教育と一口に言ってもその扱うテーマは様々な広がりを見せている。このことは国際理解教育の可能性を示唆するものであり、ますます複雑化する現代の問題を扱っていく上で緊要なことであると考え。そういった意味において、多様な切り口からアプローチする実践報告は自分にとって非常に興味深いものであった。

まさに今、「総合的な学習の時間」の中で国際理解が具体的なテーマの1つとして挙げられ、事象を多面的に捉え“総合”していく能力の必要性が叫ばれている状況において、それぞれの視点が相互に関係性を持ち始めれば、より学びの深まりが生じるのではないかと期待を持った。とりわけ、参加した会場での発表すべてがそういった「つながり」を意識したものであったことは奇遇ではないだろう。

太田満氏による「人・地域・世界をつなぐ国際理解教

育』は、小学校3年生を対象に1年間にわたって国際的な資質を育んでいこうとした意欲的な取り組みであった。子どもらが興味を抱きやすい食べ物であるイチゴ、茶などの地域の名産から導入を図ったり、中国帰国者児童が校内にいたということから中国についての調べ学習をするなど関係性のあるところから学習を進めていく部分には太田氏の創意工夫を窺い知ることができた。ただ、小学3年生という些かの限界はあるにせよ、教師から一方的にテーマを与えるのではない児童へのうまい動機づけがなされても良かったのではないだろうか。

藤原孝章氏による「総合的な学習の時間における国際理解単元の設定をめぐる課題－ウェビングによるテーマ設定を中心に－」は、長年の実践からの総括として、カリキュラムの構成原理を非常に的確にまとめられていた。その中で、テーマ設定の手法としてウェビングの有用性を説いているが、中心テーマからある関係性に基づいて広げていく無理のないこの方法は、初めてカリキュラムを主体的に創っていくことに対し教員の抱える不安を解き放つものであろう。偶然にも昨年行った自分らの発表での主張と重なるものであったが、同じ反省として、この手法を現場で実践し、その期待される有用性を確認していくことが当面の課題であろう。

最後の森茂氏と中山氏による共同発表「博物館との連携を生かしたハワイ日系移民に関する単元開発と実践～グローバル教育と多文化教育の結合可能性～」は、1つには学校を飛び出し、博物館教育と学校教育の密接な連携を試みた点、2つには子どもが展示に直接的に関わっていった点、3つにはグローバル教育と多文化教育の結合を図った点で評価される実践であった。

このように多くの主体（学校、地域、家庭、NGO等）が関わり、多様な視点やテーマで語り、一辺倒でない手法を駆使し、それぞれを有機的に結びつけていくことは、今後、国際理解教育を実践していく上で更に留意していく必要があると感じた。

最後に、会報17号の中で野島大輔氏が昨年の大会参加者の感想として「討論を更に活発化させるために、各研究発表の後の質疑応答時間をさらに増やす」と述べているように、本学会のスタイルの再検討をお願いしたい。いくら質疑応答の時間が10分設けられているとはいえ、事実上、一方的な発表に終始し形式的なものに陥っている。少人数になっても構わないので会場を増やし、十分に時間をかけて評価し合う方がどれだけ有意義で、現場に戻ってからの自分の活動にどれだけ生かされることであろうか。国際理解教育が従来の教育を問い直し、建設的に崩していこうと挑むものであるのならば、学会自体の姿にもそれを反映させてほしいものである。

#### ◇公開シンポジウムに参加して

横内 繁樹（啓明学園高等学校）

今回、初めて日本国際理解教育学会の第11回大会に

参加した。各先生方の発表もさることながら、私の一番のテーマがこの公開シンポジウムの「国際理解教育におけるメディアリテラシー」であった。概念としてはまだ定着していないメディアリテラシーの教育への活用実践報告を中心に、非常に興味深いものであった。コーディネーターは東京学芸大学海外子女教育センターの佐藤郡衛先生と筑波大学の嶺井明子先生。このお二人の進行でディスカッションが進められた。

はじめのパネラーは、つくば市立竹園東小学校の吉田浩先生。「ネットワークを活用した授業実践」と題し、市内の小中学校の取り組みについて発表された。共同の掲示板を作り、地域内の学校と自由に意見交換ができるシステムを作り学習に役立てている。問題点として今の子供たちに欠けている「情報の真偽を見極める力の弱さ」をあげられた。各学校現場でのインターネットの調べ学習は第1段階を終えていると私個人は考える。今後重要なのは、得た情報の質と自分の中への取り込み方、つまり、どのように自分の考えが深まったのか、そこから得た情報でどのように影響を受けたのか明確にしてゆく必要があるであろう。

次の発表は神奈川県川崎市立長沢中学校の滝多賀雄先生から「情報収集にすばやいメディアの活用」と題して、日常の授業の中での中学生にできる活用方法を発表された。パソコンの指導は機器の使用法に限られているところが多く、「情報の収集」は初歩からの指導が必要という観点から、サイトの信用度、情報を提供してくれる人はどのような人たちか、その裏付けの取り方まで実践されている報告であった。生徒は目新しいものにすぐに飛びつくもので、指導者はその気持ちを大切に、探求心、チャレンジ精神をより大きなものにしてゆく必要がある。指導者は自分の枠に縛られることなく生徒の学習活動を支援する努力が必要である。

3人目のパネラーはNHK中部ブレイズ制作部長の市川克美氏で「メディアリテラシーで鍛える国際理解の力」を報告された。メディアリテラシーとはメディアによって情報を批判的に読みとったり、創造的に表現するための複合的な概念であると位置づけて、「新聞やテレビと上手につきあう方法」だけではないと警鐘をならされた。概念が定着しないものに定義付けを行うことは非常に大切なことである。また、情報の発信者側からの貴重な意見を多く伺え、今後この問題を考える上で非常に参考になる内容であった。

最後のパネラーは「一次メディアリテラシーを高める経験教育を目指して」というテーマで日本大学の小笠原善康先生が発表された。メディアリテラシーを多面的に見てゆくことの大切さを訴えられ、マスコミ批判だけでは前進はない、自分がどう関わることが明確になっていないと新たな知識は得られないというものであった。マスメディアの情報送付方法は時に人から思考力を奪うものともなりうる。よって我々はメディアに対して鋭敏な態度を身につけなければならないが、このような態度は国

際理解教育の目指すものとほぼ重なってくるという。

この後、いくつかの点について話し合いがなされたが、国際理解教育の現場では、情報の信頼性の問題、知識伝達だけではいけないこと、他人の意見を聞き比較して議論することの大切さなどが確認された。これからの社会では情報の高速化がさらに進むとともにメディアとのつきあいはより重要なものとなってくる。メディアに流される情報は本当に正しいのか、質は高いのか。それを見極める目が教育の現場では重要になってくる。また、国際理解教育を行う点で重要なことは、常に心を開き、課題を持ち続ける力を子供も教員も持つべきであること。メディアに頼らず体験することがより知識は自分のものとなりうることを学ぶことができた。それぞれの先生方がご自分の立場を明確して発言されていたので大変に活気あふれるシンポジウムであった。

#### ◇公開シンポジウムに参加して

鈴木 克典（上越教育大学院生）

第11回日本国際理解教育学会の2日目「地球時代における国と人々～授業づくりの課題～」をテーマに公開シンポジウムが開かれた。充実した議論がなされ、私にとって大きな収穫となった。筑波大学から自宅への帰路、サッカーのコンフェデレーションズ杯の優勝をかけた日本とフランスの試合が行われていた。「頑張れ日本」と叫ぶ自分に、ナショナルアイデンティティを感じるとともに、フランス系日本人にとっては私と違う応援の仕方になるだろうと想像し、「国」と自分のアイデンティティの関係について考えさせられた。

公開シンポジウムでは、どのような視点から「国」の学習が可能なのか、「国」概念の学習の実践的創出について後藤氏、金子氏、高野氏から課題提起があった。3氏の報告から国概念は、小学校段階では未分化であること。他民族・他言語国家であるベルギーでは日本人の多くが信じる国概念と違いがあること。国概念は固定されたものではなく、異なる文化的背景や価値観を持った他者と関わりながら、アイデンティティの問題として、国概念が再構成される等が明らかにされた、また指定討論者の天城氏、二谷氏からは、「共生という言葉は外国にはない。民族、文化の違いがあるから個性がある。」「多文化共生の実現は、願望であり簡単にはできない。」というスタンスでこれからの国際理解教育を進めていく示唆を得た。

協議の中では、グローバル化と「国」、「国」とローカルの問題について考えさせられた。参加者の中に、「環境問題等の地球規模の問題解決のために、国際協力が一層進むだろう」と未来をポジティブに捉えた発言があった。しかし、地球温暖化防止のための京都議定書の批准をめぐる、「議定書は多数の途上国が参加していないから。米経済へも影響があるから」という理由でアメリカが反対している。途上国は、「先進国が、長年温室効果ガスを排出してきた結果だ」と各国のナショナリズムが対立して



いる。また「新しい教科書」の問題にしても、グローバル化とナショナリズムの相剋について改めて考えていく必要があるだろう。また少子化が進み、日本はやがて移民国家になる日も近いと思われる。そこで、私たちのアイデンティティの根拠としての「国」の呪縛から解放され、多元的なアイデンティティの構築を「国」とローカルの問題としてとらえていく必要があると思う。

1 昨年、前任校の中学校で在日外国人と保護者の交流会を行った。保護者から「直接的に地域社会で接する私

たちこそ、国際理解教育が必要だ」との感想が出された。国際理解教育は、学校と地域社会の連携を視野に入れる必要がある。それは、子どもたちは社会や家庭教育の中で学ぶことが大きいからである。教育現場に戻ったとき、グローバル化と「国」、「国」とローカルの問題について自分なりに整理して、学校と地域社会の連携を視野に入れた実践を（些細なことにしかできないが）行っていこうと決意をあらたにした、私にとって有意義なシンポジウムであった。

## 大学院生研究報告

### 日本国際理解教育学会 大学院生研究協議会報告

大阪大学大学院：服部 圭子

2001年「日本国際理解教育学会 第11回大会」開催の折に、大学院に在籍する院生を中心とした若手の研究者による第1回集会在開かれた（6月9日）。近年、学会における大学院生の会員数も増加していることから、発起人の呼びかけにより学会のご理解を得て可能になったものである。大会後、理事会の承認を得て、正式に「大学院生研究協議会（通称 院生研究協議会）」が発足する運びとなった。

第1回集会では、発起人の挨拶があり、それに引き続いて出席者（7名）が互いに自己紹介を行った。その後、運営委員5名（発起人3名を含む）の選出、「院生研究協議会」の今後の企画・運営に関する様々な事項についての検討や、今後の会の在り方についての活発な意見交換が行われた。また、各所属大学や機関において入手可能な文献や研究資料についての情報交換も行われ、今後も互いに研究上の情報交換や資料紹介を行っていく旨が確認された。

本協議会は大学院生・若手研究者、および協議会が認めたそれに準ずる者によって構成されるもので、最近の

活動や問題・関心についての自主的な情報交換や相互交流を行うことを当面の目的とすることになった。相互の研究の発展・深化により「国際理解教育」および「国際理解教育学」の構築の可能性を探ることも視野に入れて活動し、今後の国際理解教育の発展に寄与することを目的としたいと考えている。将来的な本協議会からの学会への貢献の可能性としては学会への積極的な発信、共同研究や発表を行うなどの活動が考えられる。

現在の賛同者は15名であり、具体的な今後の活動案は次の通りである。

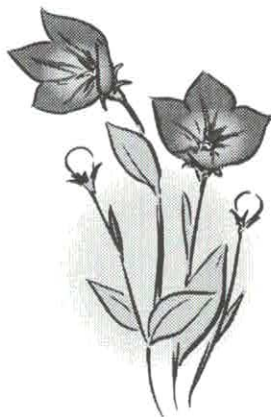
- ・ 通常はメーリングリストを通じて意見交換し、研究上のあらゆる情報交換（研究や資料など）を行う。
- ・ できれば次年度の学会大会第1日目終了後に、意見交換および翌日発表予定者のプレ発表の機会を設ける。
- ・ 引き続き、「院生研究協議会」の在り方や可能性についての協議を行う。

広報や集会当日の会場確保、配布物の費用の問題など、これからも色々と学会からのご指導・ご援助をお願いすることと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

<院生研究協議会へのお問い合わせ・申込先>

khattori@lc.lang.osaka-u.ac.jp

（帝塚山学院大学非常勤講師）



日本国際理解教育学会 第11回大会総会 議事録

2001年6月9日於筑波大学

議事

1. 2000年度事業報告(中西会員より)  
[証正事項として]9. 第3回懇話会の開催日を3月から4月14日に直す
2. 2000年度決算報告(中西会員より)
3. 2000年度会計監査報告(藤沢会員より)  
議事1~3については承認された。
4. 次期役員選挙結果報告(選挙管理委員会より)  
投票総数12票(無効3票 内白票2、期限切れ1)、理事選挙の後理事の互選にて会長・副会長を決定した。
5. 新会長挨拶(米田会長より)  
本学会の課題として  
理論と実践の結合  
新しい時代の新しい国際理解に携わる仲間を増やしていきたい 等々がある。
6. 会長推薦理事及び事務局長委嘱の件(米田会長より)  
新規約に基づき会長推薦理事6名と2名の監事を承認。また、事務局長に、帝塚山学院大学国際理解研究所真嶋氏に委嘱を承認。以上2件会員より承認された。
7. 委員会の件(米田会長より)  
ビジョン委員会を企画委員会に改名し、会長・副会長及び他の4つの委員会の委員長による構成とし、各委員会相互の調整や、本会の将来構想等について検討する会とする。
8. 規約改正の件(中西会員より)  
第6条(6)、第10条、付則5の以上3点(総会資料の下線部)についての改正案を承認した。
9. 2001年度事業計画案(多田会員より)  
総会資料の追加事項として①②も含めて承認された。  
① 実践研究会「学習方法研修を中心として」の実施校の希望があれば委員会理事まで  
② 本年度紀要の応募締め切りは7月16日、原稿は9月17日まで。  
補足事項(渡部会員より)  
紀要は後程郵送する。年2回、1年、3年といういくつかのスパンでの課題研究を。
10. 2001年度予算案(多田会員より)  
承認された。
11. 米田会長より  
① 顧問3名(天城氏、川端氏、中西氏)就任の件について提案があり承認された。  
② 筑波大学附属高等学校田尻信市会員の編集委員就任の件について提案があり承認された。  
③ 大会の将来についてアンケート調査のお願い
12. 第12回大会開催の件(下村会員より)  
次年度第12回大会は平成14年6月8日(土)、9日(日)の両日広島大学で開催の提案があり、承認された。  
(総会記録者 廿日市市立野坂中学校 小嶋 祐何郎)

1. 2000年度の第10回大会は平成12年6月10日、11日の両日、奈良教育大学(田淵五十男大会実行委員長)で行われた。大会参加者は約140名であった。
2. 「日本国際理解教育学会会報」第17号(平成12年7月)、第18号(平成13年2月)を刊行した。
3. 会員名簿追加版を平成12年7月に発行し配布した。
4. 紀要編集委員会は『国際理解教育』第6号を刊行し、第7号の編集作業を行った。
5. 実践研究委員会主催の実践研究会を次の2回実施した。  
(1) 平成12年11月15日(水)に自白学園中・高等学校で開催し、参加者約160名であった。  
テーマは「教材開発から授業実践まで」で、公開授業、実践検討会、実践討論会、全体総括で構成された。  
(2) 平成13年2月4日(日)に熊本国際交流会館で開催し、参加者約200名であった。  
テーマは「グローバル社会に生きる人間形成としての国際理解教育」で、小・中・高の分科会、基調講演、パネルディスカッションで構成された。
6. 国際委員会は、中国へのスタディ・ツアーを平成12年8月20日から29日までの10日間実施した。東邦大学城、河北大学等の高等教育機関を訪問し、相互理解を促進した。参加者は15名(現地参加者3名を含む)であった。
7. 研究委員会は平成13年度大会の特定課題研究テーマの企画・運営を行った。一昨年度からの継続で、テーマは『地球時代における「国」と人々』で、13年度は『授業づくりの課題』である。
8. ヴィジョン検討委員会は学会の中・長期計画における研究推進並びに管理運営の問題を検討してきた。名称変更と各委員会との連携のあり方を今後の検討課題であるとした。
9. 第3回懇話会(講師千葉果弘氏)を平成13年3月に行った。
10. 役員選挙を平成12年12月から平成13年1月にかけて実施した。
11. 平成13年4月現在の会員数は、472(正会員423、学生会員48名、団体会員1)である。

2000年(平成12年)度会計決算報告

(平成12年4月1日から平成13年3月31日まで)

I. 収入の部

単位(円)

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	備 考
入会金	210,000	141,000	△69,000	3,000×47名
年会費	3,600,000	3,374,000	△226,000	404名
助成金	2,000,000	2,000,000	0	公文国際奨学財団より
雑収入	200,000	99,158	△100,842	紀要・報告書販売他
当期収入合計(A)	6,010,000	5,614,158	△395,842	
前期繰越収支差額	674,231	674,231	0	
収入合計(B)	6,684,231	6,288,389	△395,842	

II. 支出の部

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	備 考
<b>1. 事業費</b>	<b>3,180,000</b>	<b>3,079,650</b>	<b>100,350</b>	
大会運営補助費	500,000	500,000	0	13年度大会用
紀要編集委員会費	300,000	266,656	33,344	7号編集費
実践研究委員会費	400,000	420,340	△20,340	
研究委員会費	350,000	350,000	0	
国際委員会費	280,000	304,034	△24,034	
ビジョン検討委員会費	150,000	150,000	0	
紀要刊行費	1,000,000	1,000,000	0	6号刊行費
会報刊行費	200,000	88,620	111,380	17,18号発行費
<b>2. 管理費</b>	<b>2,910,000</b>	<b>1,891,143</b>	<b>1,018,857</b>	
人件費	1,100,000	601,530	498,470	アルバイト費
事務局運営費	200,000	240,796	△40,796	電話・コピー
通信費	500,000	455,860	44,140	
設備・備品費	50,000	3,024	46,976	
消耗品費	300,000	65,794	234,206	
会議費	100,000	85,186	14,814	
旅費交通費	400,000	234,410	165,590	
雑費	10,000	3,790	6,210	
事務局移転費	100,000	75,990	24,010	
役員選挙費	150,000	124,763	25,237	
<b>3. 予備費</b>	<b>594,231</b>	<b>0</b>	<b>594,231</b>	
当期支出合計(C)	6,684,231	4,970,793	1,713,438	
当期支出差額(A)-(C)	△674,231	643,365	△30,866	
次期繰越収支差額(B)-(C)	0	1,317,596	△1,317,596	

## 役員一覧表

役職	氏名	所属	役分担
顧問	天城 勲	高等教育研究所	
	川端 末人	神戸大学	
	中西 晃	目白大学短期大学部	
常任理事	米田 伸次	帝塚山学院大学	会長・企画委員会
	多田 孝志	目白大学	副会長・実践研究委員会・企画委員会
	天野 正治	聖徳大学	研究委員会
	安藤 益代	日本国際交流振興会	国際委員会
	宇土 泰寛	東京都港区立三光小学校	研究委員会
	田淵五十生	奈良教育大学	実践研究委員会・紀要編集委員会
	千葉 杲弘	国際基督教大学	国際委員会・企画委員会
	中島 章夫	国際教育交流馬場財団	企画委員会
	二谷 貞夫	上越教育大学	紀要編集委員会、企画委員会
	嶺井 明子	筑波大学	研究委員会
	渡部 淳	国際基督教大学高等学校	研究委員会・企画委員会
理事	新井 郁男	愛知学院大学	実践研究委員会
	大津 和子	北海道教育大学	紀要編集委員会
	佐藤 郡衛	東京学芸大学	
	島 久代	千葉大学	
	二宮 皓	広島大学	国際委員会
	中村 幸士郎	山口大学	国際委員会
	樋口 信也	帝京大学	紀要編集委員会
	藤原 孝章	富山大学	実践研究委員会
	真嶋 克成	帝塚山学院大学	事務局
	森茂 岳雄	中央大学	紀要編集委員会
	監事	相良 憲昭	京都ノートルダム女子大学
岡田 真樹子		国際基督教大学高等学校	

## 委員会一覧表

委員会名	委員長	委員
企画委員会	中島章夫	米田伸次、多田孝志、渡部 淳、千葉杲弘、二谷貞夫
研究委員会	渡部 淳	天野正治、宇土泰寛、嶺井明子
実践研究委員会	多田孝志	新井郁男、藤原孝章、田淵五十生
国際委員会	千葉杲弘	安藤益代、二宮 皓、中村幸士郎
紀要編集委員会	二谷貞夫	樋口信也、田淵五十生、森茂岳雄、大津和子、三見信市

1. 第12回研究大会

開催予定：2002年(平成14年)6月8日(土)、9日(日)

場 所：広島大学(大会準備委員長 二宮 皓)

2. 実践研究会(実践研究委員会)

① 第1回 2001年11月14日——千葉県国際理解教育研究会と共催

② 第2回 2002年1～2月——学習方法研修を中心として

3. 『国際理解教育』第8集の編集と刊行(紀要編集委員会)

4. 韓国スタディツアーの実施(国際委員会)

期 日：2001年8月19日～25日

場 所：韓国～Seoul市、Incheon市

5. 特定課題についての検討研究会(研究委員会)

6. 公開研究会/シンポジウムの開催(研究委員会)

7. 学会21世紀の中・長期ビジョンの検討(企画委員会)

8. 学会の総合調整とイメージアップ及び拡大の検討(企画委員会)

9. 各編刊行物と配布

① ニュースレター 19号、20号の刊行

② 会員名簿の刊行

10. 他団体との提携による事業

11. その他

各委員会の事業計画

<企画委員会>

委員長 中島 章夫

1. 前年度の最終段階で、定年制を初め各委員会のあり方等学会の基本方針について一応の結論を得ているので、米田会長の下新体制になった今年度は、企画委員会の主な役割を、総合調整機能のほか、総会、理事会、常任理事会、各委員会等の間の一体性を高め、学会の内外へのイメージアップを図ることに重点を置く。

2. 上記1の方針から、当面、各常設委員会間の無理のないコーディネーションのあり方を求めて、それぞれ例えば次のような改善の方向を検討する。なお、近く実施されるアンケート調査の結果を尊重する。

(研究委員会)

① 研究内容を会員に見えるようにするため、日程や方針を公表する。

② 研究大会のシンポや特定課題研究との関連を考える。

③ 新会員や新役員の登竜門としての活用を考える。

(実践研究委員会)

①開催地(戦略地域)の早期アナウンスメント情報の集約、活用。

②他の委員会と連携強化のあり方検討。

③リクルート委員会の立ち上げとアフターケア。

(紀要編集委員会)

①学者研究者向けと教育現場向けのスペースは作れないか。

②他の委員会との連携重視——企画委員会の活用。

③親しみやすさの演出と紀要の活用推進案。

(国際委員会)

①国内学会活動との連携——参加者の経験報告等。

②実践研究会との連携——熊本県立菊池農高校と韓国の例。

③国内他の国際活動との連携のあり方検討。

3. 企画委員会の開催は、原則として常任理事会の当日昼食時とし、委員会で取り上げ理事会等で決定したものは、その都度実施に移すが、その他のものは、今年度の最終理事会に報告する。

4. 企画委員会本来の役割である、21世紀の学会の進むべき長期的展望については、広く会員の意向を集約しながら、上記3とは別に集中的な議論を行い理事会に報告する。

## <研究委員会>

委員長 渡部 淳

今期は、天野正治、宇土泰寛、嶺井明子の各理事および渡部の4名の研究委員で事業を進めてまいります。よろしくお願い致します。委員会の基本方針を以下の3つの点から申し述べたいと思います。

まず第一は、「特定課題研究」です。現在は、研究大会で発表される「特定課題研究」の企画・運営が研究委員会の主な仕事となっております。発表者については、歴史、理論、比較、実践研究などの専門家を学会会員の中から委嘱するのが、原則ですが、今後は学会メンバー以外の専門家にも登壇していただく方策を積極的に探り、特定課題研究の一層の活性化を図りたいと考えております。また、「特定課題研究」の発表者が参加する準備会議については、これを可能な限り公開委員会とし、興味のある会員の方々が参加できるようにすることも考えたいと思います。

第二は、本年度から開始する新たな企画についてです。具体的には、年間少なくとも1回、研究大会と別に、研究委員会が主体となって企画・運営にあたる「シンポジウム」ないし「公開研究会」を開催したいと考えております。近年の国際理解教育研究への期待の高まりや社会変動のスピードなどを考慮するにつけ、年一回の研究大会では十分とは言えないと判断するに至ったからです。シンポジウムの発表者の構成については特定課題研究に準ずるものとし、開催地については委員会で検討し理事会に諮ることになります。

第三は、研究委員会の活動成果を学会誌の紙面により一層反映できるようにするという課題です。この点については、紀要編集委員会との連携はもちろん、実践研究委員会、国際委員会などとの協力の強化も模索したいと考えております。

会員の皆様の一層のご協力をお願い致します。

## <実践研究委員会>

委員長 多田 孝志

### 1. 実践研究会の活動目的

国際理解教育学会の設立の趣旨を具現化する。

国際理解教育に関する理論的研究の成果を生かしつつ、国際理解教育の実践の質的向上をはかる。

授業等の実践事例や教材開発資料等の教育実践の実相を検討することにより、国際理解教育の理論研究の深化にも資する。

多くの研究者、実践者、さまざまな立場の方々の参

加を得て、本学会の研究の裾野の拡大をはかり、また会員の増加をめざす。

全国の各地で研究会や学習方法研修会を開催し、また、逐次ブロック研究会の設立をめざしていく。

### ○ 各地域での開催に当たって

実施内容・方法等については、原則として地域の方針に委ねる。

実践研究会担当理事が地方との連絡・調整にあたる。運営費は、年度の委員会に関する予算を基本に充てる。

### 2. 本年度の活動展開にむけて

#### ○ 活動目的 前述の活動目的を具現化していく。

#### ○ 組織

#### <担当理事>

新井郁男 田邊五十男 藤原孝章  
多田孝志

#### <協力委員>

実践研究の推進、研究会の企画・実行、実践現場の情報収集のため、協力委員を募集し、組織的な活動を展開する。

#### ○ 本年度の活動

見通しをもった研究内容、組織的な活動、他の委員会との連携等を目指し、学会設立の趣旨をより一層具現化していく。

2001年11月14日 水 千葉県国際理解教育研究会との共催

2002年1~2月 学習方法研究会の実施の検討(名古屋予定)

実践研究会大会年1回、学習方法研究会年1回を原則とし適時開催する。

開催地については、広く呼びかけをする

## <国際委員会>

委員長 千葉 栄弘

### 韓国へのスタディ・ツアー

日程：2001年8月19日～25日

8月19日 ソウルのホテルに現地集合

8月20日 韓国ユネスコ国内委員会事務局長表敬および活動紹介

アジア太平洋地域国際理解教育センター(ACEIU)

所長表敬

1. 韓国の国際理解教育についての講義

2. 韓国政府の教育政策についての講義

3. 日韓文化相互理解についての講義

8月21日 韓国カリキュラム・評価研究所 KICE 訪問  
大学訪問

Changdoek Palace観光[世界遺産]

Incheon市へ出発  
8月22日・23日 アジア太平洋地域国際理解教育センター  
日韓教員のグループ討議  
テーマ〔暫定〕  
日韓合同開催の2002年世界サッカー大会を如何に教えるか  
日本—韓国 E-mail Club  
歴史の教え方

いじめ、学級崩壊 等  
8月24日 韓国教育放送局訪問  
民族村見学  
8月25日 帰国  
参加者 : 日本国際理解教育学会会員 10人前後  
使用言語: グループ討議は英語 (通訳なし)  
報告書 : 2001年中に刊行予定

<平成13年度実践研究会のお知らせ>

実践研究委員会では、本年度の実践研究会の開催を次のように予定しておりますのでお知らせいたします。なお、実践研究会の期日が近づきましたら、改めて案内状をお送りします。

今回の実践研究会は、千葉県教育研究会国際理解教育部会との共催で行われます。研究会では国際理解教育の授業を公開し、それを手がかりに学習方法について検討します。また、千葉県教育研究会国際理解教育部会の諸先生から国際理解教育の実践を展開する10の学習方法を提案いただきます。さらにシンポジウムや講演により、国際的な視野から、地球時代の人間形成に資するための、国際理解教育の実践の方向を探っていきます。多数の方々に参加下さいますようご案内申し上げます。

1 日時 平成13(2001)年11月14日(水)  
午後1時30分～

2 会場 千葉縣市川市立二俣小学校  
〒272-0001 千葉縣市川市二俣678  
電話 047-328-0105

3 内容 全体会

公開授業

総合的な学習の時間における国際理解教育の実践  
シンポジウム 国際理解教育の実践の方向  
講演 2001年度全米最優秀教師による

大会申し込み方法、公開授業、シンポジウムや講演の内容につきましては、二次案内(10月頃予定)で詳細をお知らせします。

以上



2001年(平成13年)度取支予算書

(平成13年4月1日から平成14年3月31日まで)

I. 収入の部

単位(円)

科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減	備 考
入会金	210,000	210,000	0	3,000×70名
年会費	3,600,000	3,600,000	0	8,000×450名
助成金	2,000,000	2,000,000	0	公文国際奨学財団より
雑収入	※200,000	200,000	0	紀要・報告書販売他
当期収入合計(A)	6,010,000	6,010,000	0	
前期繰越収支差額	1,317,596	674,231	643,365	
収入合計(B)	7,327,596	6,684,231	643,365	

※理事会・総会資料では250,000円となっていました。計算上、タイプミスでした。200,000円に訂正し、おわびいたします。

II. 支出の部

科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減	備 考
<b>1. 事業費</b>	<b>4,250,000</b>	<b>3,180,000</b>	<b>1,070,000</b>	
大会運営補助費	500,000	500,000	0	14年度大会用
紀要編集委員会費	350,000	300,000	50,000	8号編集費
実践研究委員会費	400,000	400,000	0	
研究委員会費	400,000	350,000	50,000	
国際委員会費	300,000	280,000	20,000	
企画委員会費	150,000	150,000	0	目録印刷検討委員会
紀要刊行費	1,000,000	1,000,000	0	7号刊行費
会報刊行費	200,000	200,000	0	19.20号発行
名簿刊行費	200,000	0	200,000	
理事会費	750,000	0	750,000	前年度は管理費 の会議費、旅費交 通費に組み込ま れていたもの。
<b>2. 管理費</b>	<b>2,260,000</b>	<b>2,910,000</b>	<b>△650,000</b>	
人件費	1,100,000	1,100,000	0	アルバイト費
事務局運営費	400,000	200,000	200,000	電話・コピーホーム ページ作成・更新等
通信費	500,000	500,000	0	
設備・備品費	50,000	50,000	0	
消耗品費	200,000	300,000	△100,000	
会議費	0	100,000	△100,000	
旅費交通費	0	400,000	△400,000	
雑費	10,000	10,000	0	
事務局移転費	0	100,000	△100,000	
役員選挙費	0	150,000	△150,000	
<b>3. 予備費</b>	<b>817,596</b>	<b>594,231</b>	<b>223,365</b>	
当期支出合計(C)	7,327,596	6,684,231	643,365	
当期支出差額(A)-(C)	△1,317,596	△674,231	△643,365	
次期繰越収支差額(B)-(C)	0	0	0	



＜平成13年度第1回理事会議事録＞

日時 2001年4月21日（土）  
午後2時30分～5時00分

場所 東京YMCA会館

出席者 天野正治、新井郁男、安藤益代、宇土泰寛、多田孝志、千葉果弘、中島章夫、二谷貞夫、嶺井明子、米田伸次、渡部淳

1. 13:00～14:30まで、学会2000年度第三回理事会が開催された（報告は、中西見前事務局長より）。旧理事会の2000年度の学会活動の総括と新理事会への提言事項を踏まえて、2001年度第1回理事会が引き続いて行われた。

2. 審議決定事項

① 会長及び副会長の選出

「理事選挙結果を理事会において明らかにする」という旧理事会での確認を踏まえて、旧理事会中西見事務局長より、理事選挙の結果（投票数）が示された。続いて、「理事の互選による」（第6条）との学会規定に則り、出席理事の過半数以上の得票者を会長に推挙するという出席理事の合意に基づいて、会長選出が行われた。会長選挙のあと、引き続いて副会長の選挙が行われ、以下のように決定を見、承認された。  
会長——米田伸次（帝塚山学院大学国際理解研究所）  
副会長——多田孝志（目白大学）

② 委員会の構成並びに委員長の選出

委員会は、従前の4委員会を原則として引き継ぐことが確認された。さらに、旧理事会での総括を踏まえて、将来ビジョン検討委員会のあり方について検討された結果、企画委員会と名前を変更し、委員会は委員長及び4委員会の委員長、並びに会長、副会長を以って構成し、各委員会活動の連携と、学会の更なる発展をはかる協議の場とするという合意をみた。5委員会の委員長は次のように決定をみた。

国際委員会—委員長 千葉果弘（安藤益代）

研究委員会—委員長 渡部 淳（天野正治、宇土泰寛、嶺井明子）

実践研究委員会—委員長 多田孝志（新井郁男）

紀要編集委員会—委員長 二谷貞夫

企画委員会—委員長 中島章夫

注（ ）内の各委員は、第1回理事会出席理事のみ決定。欠席理事及び会長推薦理事については追って決定。

③ 常任理事の選出

旧理事会における「常任理事会は、会長、副会長、各委員会の委員長を原則として、学会の発展という

観点から若干の理事を加えて構成する」という常任理事の構成基準についての新理事会への提言を踏まえ、次のような決定をみた。

米田伸次、多田孝志、千葉果弘、渡部 淳、二谷貞夫、中島章夫、安藤益代、天野正治、宇土泰寛、嶺井明子、田淵五十生（以上11名）

④ 会長推薦理事として以下の5名が会長より推薦され、承認された。

二宮 皓、森茂岳雄、樋口信也、藤原孝章、中村幸士郎（以上5名）

⑤ 顧問については次のような理事会での合意の結果、天城前会長、川端、中西前副会長の了解を得た。

前会長 天城 勲、前副会長 川端末人（3ヶ年間）、前副会長 中西 晃（3ヶ年間）

⑥ 事務局長並びに監事の承認

イ、「事務局長は理事会の承認を得て会長が委嘱する」（規約第9条）に基づいて、次のような決定をみた。

真嶋克成（帝塚山学院大学国際理解研究所室長）

ロ、監事 相良憲昭、岡田真樹子

⑦ 2001年4月～2004年4月の3ヶ年間の日本国際理解教育学会の理事会は以下の20名によって構成されることになった。

会長 米田伸次 副会長 多田孝志  
天野正治、新井郁男、安藤益代、宇土泰寛、大津和子、佐藤郡衛、島 久代、田淵五十生、千葉果弘、中島章夫、中村幸士郎、二谷貞夫、二宮 皓、嶺井明子、樋口信也、藤原孝章、森茂岳雄、渡部 淳（以上、20名）

⑧ その他の合意・確認事項は次の通り。

1. 2002年度、研究大会は広島大学において行う。次回、理事会で正式に決定し、第11回研究大会において発表する。

2. 規約第9条（事務局）の改正を行う

3. 第1回常任理事会及び第2回理事会を6月8日、湯島ガーデンパレスにおいて開催する（14:30～17:30）

4. 2001年度の事業案並びに予算案は、各委員会委員長が5月20日までに事務局まで提出する。（最終決定は5月31日とする）

5. 実践研究委員会、研究委員会の2001年度の会員向けの研究（修）会の設定については、次回理事会に提出、承認を得て、第11回研究大会において発表する。

6. 会員に対して、会員のかかえている国際理解教育の課題や学会へのニーズなどアンケートを実施して現状把握につとめる。（6月上～中旬）

7. 2001年度予定の海外研修、（韓国8月下旬）については、千葉国際委員長より5月に各会員に広報する。

8. 第19回「ニュース・レター」を2001年7月に発刊する

9. 会員増強に向けたキャンペーンを第11回大会を契機に開始する。
10. 学会紀要の残部が大量にあるので、これの活用を早急に検討する。
11. 渡部理事によって続けられてきた「懇話会」の今後のあり方については、次回理事会において話し合う。

## ＜平成13年度第1回常任理事会記録＞

日 時：平成13年6月8日（金）

午後2時30分～4時30分

場 所：東京ガーデンパレス

出席者：米田、多田、天野、安藤、宇土、田淵、千葉、  
中島、二谷、真嶋

報告事項

開会挨拶 米田伸次次期会長

### ① 今期の役員及び各委員会構成

米田次期会長より資料「平成13年度日本国際理解教育学会役員・委員会一覧表」により説明。先の4月21日の理事会で、事務局長に帝塚山学院大学国際理解研究所室長の真嶋克成氏を決定したが、内規では、「事務局長は理事から選任する」となっているため、「真嶋氏を理事として推薦する件」が提起され、全員一致で承認された。

また、顧問の川端末人前副会長と中西晃前副会長については、両会員の申出により今期3年間とする。顧問の理事会への出席は特に要請することをしないが、必要がある場合、案内を出す、ことで承認をみた。

今期、委員会として新たに設けられた「企画委員会」の構成と役割について、会長、副会長及び各委員会委員長により構成されること、将来の学会の展望、各委員会の調整などを行うことの確認をみた。

### ② 第11回大会の準備状況

総会準備で欠席した嶺井理事のメッセージを次期会長が紹介。現在113名の申し込みがあること、研究発表（自由研究発表V）の司会者樋口信也理事が欠席されることなどが報告され、樋口理事の代わりに二谷貞夫理事が担当することになった。

### ③ 新事務局について

米田次期会長より、今年度から、帝塚山学院大学国際理解研究所に学会の事務局が移ったことを、全会員に5月中旬に通知したことが報告された。

### ④ 第12回大会の開催

二宮理事から、来年6月8日（土）、9日（日）広島大学で開催することを大学として了承している旨報告があった。

### ⑤ 国際委員会主催・韓国研修日程・内容

千葉理事から別紙資料に基づき、説明があった。現在12名の申し込みがあるなどの説明があった。

### 審議事項

#### ① 2001年度事業計画案（各委員の事業計画）

米田次期会長から別紙資料「2001年度事業計画（案）」に基づき年間計画の概要の説明があり承認された。

さらに、各委員会の委員長からも、それぞれ委員会の事業計画について別紙添付資料に基づき説明があった。

- ・ 実践研究委員会報告（多田委員長）：担当理事以外に、協力委員として10人程度依頼の予定。東京以外でも実践研究会を積極的に開催し、学会の活動を広げて行きたい。

11月14日（水）千葉県国際理解教育研究会との共催。2002年1～2月 学習方法研修会の実施を検討（名古屋予定）している。

学習方法研修会の中身が見えにくいので、具体的な内容を説明した方がいい、例えば、コミュニケーション能力を育てるとか、国際理解教育を進める10の方法とか、教育内容と教育方法を統一できるようなものを検討してはとの意見が出された。

- ・ 国際委員会（千葉委員長）：今年は8月19日から25日まで韓国へのスタディツアーを行う。12月末には報告書を作成する。報告書は全会員に配布する。来年度の計画は12月の理事会に提出する。

- ・ 紀要編集委員会（二谷委員長）：編集委員として、理事以外に筑波大学付属高校の田尻信市会員を加えたい。8号の原稿募集の広報を6月20日、応募締め切りを7月16日、9月17日が原稿締め切りとする。明日（6月9日）第1回の編集委員会、2回目の編集委員会を7月21日（土）に、10月5日第3回目の編集委員会をおこなう。12月中旬に原稿のリライトを行いたい。

- ・ 企画委員会（中島委員長）学会の総合調整、学会の内外へのイメージアップと拡大を図ることに重点を置く。各委員会のコーディネートの役割を果たしたい。学会の中・長期ビジョンの検討を一泊して集中的に行いたい。委員会は、毎回常任理事会開催日当日に行う予定。

米田次期会長から、各委員会で協力委員をお願いする場合、原則として理事会の承認はもらわない。また協力委員の交通費は各委員会の予算枠内で処理するようにとの要望があり、了承された。毎回のニュースレターに各委員会の活動を掲載していくことも確認された。

#### ② 2001年度予算案

別紙資料に基づき真嶋事務局長から説明があり承認された。

昨年より65万円ばかり予算額が上がったのは、今年度名簿を発行するための印刷代（20万円）、理事会への参加理事の交通費、及び理事会開催場所の会場費（25万円）、事務局運営費（20万円アップ）はホームページの更新などの経費、学会事務局諸経費である。昨年

は管理費の中に旅費交通費及び会議費の項目が入れられていたが、今回から事業費の中に、新しく理事会費の科目を設け、理事の旅費交通費、会議費等の支出はこの理事会費から出すことにする。

米田次期会長から新入会員の増強に力を入れたい。これについては理事の一層の協力をお願いしたいとの要請があり、また公文国際奨学財団からの多額の助成金をいただいていることに感謝して、中島理事、多田次期副会長と次期会長が4月30日に財団へ挨拶に参上した旨報告があった。

- ③規約改正案（学会事務局移転に伴う件、監事委嘱の件）  
真嶋事務局長から別紙規約並びに改正案をもとに、下記の改正案が大会の総会で承認を受けることになる旨を説明した。

第6条（6）「監事は、理事会及び総会の承認を得て、会長が委嘱する。監事は本会の会計を監査する」を「監事は、会長が提案し、理事及び総会の承認を経て委嘱する。監事は本会の会計を監査する」の下線部分に改正。

第10条（事務局）「本会は、事務局を目白大学短期大学部に置く」を「本会は、事務局を帝塚山学院大学国際理解研究所に置く。」の下線部分に改正。

- ④ 後援事項

別紙資料により「東南アジア・ユネスコ協同学校視察研修」（主催・帝塚山学院大学国際理解研究所、後援日本ユネスコ協会連盟、ユネスコ・アジア文化センター）の後援申請が主催団体の帝塚山学院大学国際理解研究所から出され、承認された。

- ⑤ 2001年度総会次第

別紙のとおり、第11回大会では、総会の承認によって役員が決定するというルールを踏まえて、総会司会を中西見前事務局長に、会長挨拶は天城勲前会長にお願いすることで了解をみた。

- ⑥ 新入会員・退会会員

別紙資料に基づき、審議の結果、全員の入会が承認された。

以上

## <平成13年度第2回理事会記録>

日時：平成13年6月8日（金）  
午後4時30分～7時00分

場所：東京ガーデンパレス

出席者：米田、多田、天野、安藤、宇土、大津、島、  
田淵、千葉、中島、中村、二谷、二宮、藤原、  
森茂、渡部、真嶋

報告事項

開会挨拶 米田伸次次期会長

- ① 今期の役員及び各委員会構成

米田次期会長より資料「平成13年度 日本国際理解教育学会役員・委員会一覧表」により説明。先の4月21日の理事会で、事務局長に帝塚山学院大学国際理解研究所室長の真嶋克成氏を決定したが、内規では、「事務局長は理事から選任する」となっているので、「真嶋氏を理事として推薦する件」が提起され、全員一致で承認された。

また、顧問の川端末人前副会長と中西 見前副会長については、両会員の申出により今期3年間とする。顧問の理事会への出席は特に要請することをしないが、必要がある場合案内を出す、ことで承認をみた。

今期、委員会として新たに設けられた「企画委員会」の構成と役割について、会長、副会長及び各委員会委員長により構成されること、将来の学会の展望、各委員会の調整などを行うことの確認をみた。

- ② 第11回大会の準備状況

総会準備で欠席した嶺井理事のメッセージを次期会長が紹介。現在113名の申し込みがあること、研究発表（自由研究発表V）の司会者樋口信也理事が欠席されることなどが報告され、樋口理事の代わりに二谷貞夫理事が担当することになった。

- ③ 新事務局について

米田次期会長より、今年度から、帝塚山学院大学国際理解研究所に学会の事務局が移ったことを、全会員に5月中旬に通知したことが報告された。

- ④ 第12回大会の開催

二宮理事から、来年6月8日（土）、9日（日）広島大学で開催することを大学として了承している旨報告があった。

- ⑤ 国際委員会主催・韓国研修日程・内容

千葉理事から別紙資料に基づき、説明があった。現在12名の申し込みがあるなどの説明があった。

審議事項

- ① 2001年度事業計画案（各委員の事業計画）

米田次期会長から別紙資料「2001年度事業計画（案）」に基づき年間計画の概要の説明があり、全員一致で承認された。

各委員会の委員長から、それぞれ委員会の事業計画について別紙添付資料に基づき説明があった。

・ 実践研究委員会報告（多田委員長）：担当理事以外に、協力委員として10人程度依頼の予定。東京以外でも実践研究会を積極的に開催し、学会の活動を広げて行きたい。

11月14日（水）千葉県国際理解教育研究会との共催。2002年1～2月 学習方法研修会の実施を検討（名古屋予定）している。学習方法研修会の中身が見えにくいので、具体的な内容を説明した方がいい、例えば、コミュニケーション能力を育てるとか、国際理解教育を進める10の方法とか、教育内容と教育方法を統一できるようなものを検討してはとの意見が出

された。

- ・ 国際委員会（千葉委員長）：今年は8月19日から25日まで韓国へのスタディツアーを行う。12月末には報告書を作成する。報告書は全会員に配布する。来年度の計画は12月の理事会に提出する。
- ・ 研究委員会（渡部委員長）別紙資料に基づき、説明。特に今年からは「特定課題研究」では、研究ができあがって行くプロセスやディスカッションの内容をできるだけ多くの会員に知っていただくため、その一つの方法として、準備会議を公開委員会として予め会員に日程、会場を知らせて、興味ある会員の参加を促す。
- ・ 紀要編集委員会（二谷委員長）：編集委員として、理事以外に筑波大学付属高校の田尻信市会員を加えたいとの申し出を承認した。8号の原稿募集の広報を6月20日、応募締め切りを7月16日、9月17日が原稿締め切りとする。明日（6月9日）第1回の編集委員会、2回目の編集委員会を7月21日（土）に、10月5日第3回目の編集委員会をおこなう。12月中旬に原稿のリライトを行いたい。
- ・ 企画委員会（中島委員長）学会の総合調整、学会の内外へのイメージアップと拡大を図ることに重点を置く。各委員会のコーディネートの役割を果たしたい。学会の中・長期ビジョンの検討を一泊して集中的に行いたい。委員会は、毎回常任理事会開催日当日に行う予定。米田次期会長から、各委員会で協力委員をお願いする場合、原則として理事会の承認はもらわない、また協力委員の交通費は各委員会の予算枠内で処理するようとの要望があり、了承された。毎回のニュースレターに各委員会の活動を掲載していくことも確認された。

## ② 2001年度予算案

別紙資料に基づき真嶋事務局長から説明があり、全員一致で承認された。昨年より65万円ばかり予算額が上がったのは、今年度名簿を発行するための印刷代（20万円）、理事会への参加理事の交通費、及び理事会開催場所の会場費（25万円）、事務局運営費（20万円アップ）はホームページの更新などの経費、学会事務局諸経費である。昨年は管理費の中に旅費交通費

及び会議費の項目が入れられていたが、今回から事業費の中に、新しく理事会費の科目を設け、理事の旅費交通費、会議費等の支出はこの理事会費から出すことにする。

米田次期会長から新入会員の増強に力を入れたい。これについては理事の一層の協力をお願いしたいとの要請があり、また公文国際奨学財団からの多額の助成金をいただいていることに感謝して、中島理事、多田次期副会長と次期会長が4月30日に財団へ挨拶に参上した旨報告があった。

## ③ 規約改正案（学会事務局移転に伴う件、監事委嘱の件）

真嶋事務局長から別紙規約並びに改正案をもとに、下記の改正案が大会の総会で承認を受けることになる旨説明があり承認した。

第6条（6）「監事は、理事会及び総会の承認を得て、会長が委嘱する。監事は本会の会計を監査する」を「監事は、会長が提案し、理事及び総会の承認を経て委嘱する。監事は本会の会計を監査する」の下線部分に改正。

第10条（事務局）「本会は、事務局を目白大学短期大学部に置く」を「本会は、事務局を帝塚山学院大学国際理解研究所に置く。」の下線部分に改正。

## ④ 後援事項

別紙資料により「東南アジア・ユネスコ協同学校視察研修」（主催・帝塚山学院大学国際理解研究所、後援日本ユネスコ協会連盟、ユネスコ・アジア文化センター）の後援申請が主催団体の帝塚山学院大学国際理解研究所から出され、承認された。

## ⑤ 2001年度総会次第

別紙のとおり、第11回大会では、総会の承認によって役員が決定するというルールを踏まえて、総会司会を中西晃前事務局長に、会長挨拶は天城勲前会長にお願いすることで了解をみた。

## ⑥ 新入会員・退会会員

別紙資料に基づき、審議の結果、全員の入会が承認された。

以上



新入会員・退会会員及び会員異動

◆入会会員

以下の36名の方が平成13年3月から7月の間に入会しました。

氏名	所属	連絡先
中山 京子	東京学芸大学教育附属 学部附属世田谷小学校	213-0001 神奈川県川崎市高津区溝口1-20-13 コーポウイング102
塚本 美恵子	駿河台大学	358-0054 埼玉県入間市野田1060-9
松尾 毅	アイエスエイ	816-0941 福岡県大野城市東大1-3-1 サニーマンション白木原204
川村 三郎	東京造形大学	167-0042 東京都杉並区西荻北1-18-9
中根 惇子	水戸ユネスコ協会	311-1517 茨城県鹿島郡銚田町銚田49-1
福井 延幸	目白学園高等学校	116-0011 東京都荒川区西尾久3-10-3-101
伊藤 実	東京都葛飾区立亀青小学校	270-2253 千葉県松戸市日暮4-11-6
成瀬 博文	中村中学校・高等学校	345-0826 埼玉県南埼玉郡宮代町学園台2-6-12
金久保 紀子	東京家政学院筑波女子大学国際学部	305-0031 茨城県つくば市吾妻
柳 沼 勉	浦和市立大谷口小学校	347-0121 埼玉県北埼玉郡騎西町動地1510-5
横田 睦子	大阪大学言語文化研究科	606-8285 京都市左京区北白川東久保田町70-4
原 恵美子	つくば市立二の宮小学校	305-0051 茨城県つくば市二の宮4-1-1
中山 あおい	筑波大学大学院教育学研究科	270-0025 千葉県松戸市中和倉182-7
福田 紀子	国際理解教育センター	203-0053 東京都東久留米市本町1-13-1-207
平岡 雅美	茨城県結城市結城小学校	300-3555 茨城県結城市八千代町芦ヶ谷1081
神谷 純子	一橋大学院	193-0941 東京都八王子市狭間町1804-50
法澤 剛一	筑波大学院	152-0034 東京都目黒区緑ヶ丘2丁目20-17-202
野中 春樹	広島工業大学附属高等学校・中学校	731-3161 広島市安佐南区沼田町伴6006-4
千葉 充	東京都立町田高等学校定時制	195-0053 東京都町田市能ヶ谷町514-12
真嶋 克成	帝塚山学院大学国際理解研究所	584-0071 大阪府富田林市藤沢台3-5-61
尾崎 司	東京都青少年センター	154-0002 東京都世田谷区下馬1-47-23 矢代ビル301
田村 知子	九州大学大学院	811-4215 福岡県遠賀郡岡垣町旭台5-12-16
羽成 祐子	筑波大学大学院	300-0136 茨城県新治郡霞ヶ浦町戸崎802
松尾 泉	京都学園大学大学院	621-0802 京都府亀岡市北河原町1-2-26-305
田村 かすみ	神戸大学大学院	662-0836 兵庫県西宮市大畑町5-35
岸田 由美	金沢大学	921-8105 石川県金沢市平和町2-24-22アドバンスへいわ416
高野 剛彦	神戸市立六甲アイランド高等学校	673-0534 兵庫県三木市緑が丘町本町1-126-1
平 彰夫	松戸市立常盤平第二小学校	270-0003 千葉県松戸市東平賀105-59
甲山 和美	大阪府立北淀高等学校	607-8076 京都府京都市山科区音羽役出町1-27-801
山口 初一	愛知県立愛知工業高等学校	485-0011 愛知県小牧市大字岩崎2248-107
高橋 順一	桜美林大学	229-0011 神奈川県相模原市大野台2-26-17
桜美林・草の根	国際理解教育支援プロジェクト	194-0294 東京都町田市常盤町3758 桜美林大学忠生第2ゼミビル205
関根 真理	啓明学園初等・中学・高等学校	205-0014 東京都羽村市羽加美1-18-2
市瀬 智紀	宮城教育大学	980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉
白鳥 絢也	焼津市立和田小学校	420-0886 静岡県静岡市大岩三丁目26-10-7
吉村 雅仁	奈良教育大学	630-8528 奈良県奈良市高畑町 奈良教育大学

◆会員の異動

次の方々の連絡先・所属等の変更がありました。

◇連絡先・電話変更

氏名	連絡先	電話・FAX
日高 博子	558-0004 大阪府大阪市住吉区長居東3-12-26	
佐藤 昭治	186-0003 東京都国立市富士見台1-8-48-201	
本間 正人	145-0062 東京都大田区北千束1-13-15-A102	03-5731-7708
稲葉 茂勝	186-0001 東京都国立市北1-7-23 国立ビル(株)エヌ・アンドエス企画内	
早川 則男	272-0834 千葉県市川市国分3-12-4	047-318-4033
近藤 真理子		072-244-8267
木之下 研悟	805-0025 北九州市八幡東区中尾3丁目1-27	
マスデン真理子	862-0924 熊本県熊本市帯山4-4-25	096-381-7207
永田 忠通	870-1192 大分県大分市且野原700 大分大学教育福祉科学部	097-554-7546
金井 裕美子	9202 W71 <sup>st</sup> st., Merriam, KS, 66204 U.S.A.	
大杉 千恵子	466-0811 愛知県名古屋市昭和区高峯町72-1ヒルズ高峯1-D	052-836-1861
足立 恵子	473-0918 愛知県豊田市高美町3-40	
森田 真樹	607-8352 京都府京都市山科区西野岸ノ下町29-1 ガーデンブレイス寺岡406	075-595-0091
森田 文 (旧姓佐々木)	607-8352 京都府京都市山科区西野岸ノ下町29-1 ガーデンブレイス寺岡406	075-595-0091
藤川 いづみ	192-0363 東京都八王子市別所1-86-10	
長谷川 朋美	607-8066 京都府京都市山科区音羽森廻り町27	075-502-2025
大津 和子	002-8071 北海道札幌市北区あいの里1条6丁目3-1-702	011-778-5837
野口 昇	270-1168 千葉県我孫子市根戸902-38	0471-81-2370
鷺原 進	790-8577 愛媛県松山市文京町3 愛媛大学教育学部社会科教育研究室	089-927-9412
詫摩 武雄	108-0073 東京都港区三田2-4-9-302	03-3452-9902
岡崎 裕	569-0052 高槻市城東町2-18-303	
江崎 広章	289-0211 千葉県香取郡神崎町立野521-272	0478-70-1171
永井 睦子	923-0302 石川県小松市符津町ノ1100 小松市立符津小学校	
大島 薫	344-0062 埼玉県春日部市粕壁東2-10-32-906	
福田 隆真	753-8513 山口県山口市吉田1677-1山口大学教育学部美術教育	083-933-5370
城戸 一夫	183-0004 府中市紅葉丘1-10-22	042-302-8200
福井 延幸	116-0011 東京都荒川区西尾久5-12-2	

#### ◇所属の変更

中西 晃	目白大学短期大学部 (名称変更)
佐藤 昭治	一橋大学大学院
星村 平和	帝京大学 退職
松村 和子	文京女子大学
川村 千鶴子	大東文化大学
高野 英俊	さいたま市立沼影小学校
森田 真樹	立命館大学
藤川 いづみ	和泉短期大学
善財 利治	白井市立大山口中学校 (名称変更)
富田 主計	愛知県立豊田南高等学校
長谷川 朋美	Department of Secon Language Studies, University of Hawaii at Manoa
多田 孝志	目白大学
刈間 順子	東京都港区立青南小学校
鷺原 進	愛媛大学
永井 睦子	小松市立符津小学校
長谷川 善一	新国立劇場運営財団
古本 英之	札幌国際大学

## ◇メールアドレス変更

足立 恵子 k-adachi@pop06.odn.ne.jp  
善財 利治 fwif9589@mb.infoweb.ne.jp  
中村 泰子 takio59@hotmail.com

## ◆退会会員

次の22名の方が平成13年7月末までに退会されました。

鈴木英史、木村洋子、三宅政子、福澤郁文、藤井誠、小林亮、町田隆吉、山口茂、新田ゆかり、石川真理、小池啓納、  
棚橋乾、鶴松勝利、土岐達男、上寺久雄、多田 方、香西 武、越智清隆、須賀葉子、平岡龍人、山田鐵男、鈴木陽子  
現会員数 479名

## お知らせ・寄贈図書・学会後援名儀

### ◆公文国際奨学財団より委託金受領のお知らせ

毎年委託を受けております公文国際奨学財団より、本年度も200万円の調査研究・資料収集委託費をいただきました。  
この委託金は紀要刊行等、学会活動において重要な役割をはたしております。この誌上を借りて厚く御礼申し上げます。

### ◆会員等からの図書・文献寄贈

次の図書や文献が学会に寄贈されました。この場をかりて御礼するとともにお知らせします。

- エヌ・アンド・エス企画『きみにもできる国際交流』第3期・10巻（フランス、ドイツ・オランダ、スイス・オーストリア、イタリア・ギリシア、スペイン・ポルトガル、デンマーク・スウェーデン・ノルウェー、チェコ・ハンガリー・ポーランド、ロシア、エジプト、ブラジル・ペルー）、偕成社
- 中国帰国者定着促進センター紀要 第9号
- 日本教育学会『教育学研究 第68巻 第2号』
- 帝塚山学院大学国際理解研究所『国際理解』32号
- 帝塚山学院大学国際理解研究所報 第14号

### ◆学会後援事業のお知らせ

下記の通り、学会後援の事業が開催されましたのでご報告いたします。

- 「東南アジア・ユネスコ協同学校教育視察研修団派遣」事業

主 催：帝塚山学院大学国際理解研究所

後 援：日本国際理解教育学会、日本ユネスコ協会連盟、ユネスコアジア文化センター

派遣国：フィリピン、タイ

派遣期間：2001年8月1日（水）～8月16日（木）

カウンターパート：フィリピンユネスコ国内委員会及びASPコーディネーター

タイユネスコ国内委員会

ユネスコアジア太平洋地域事務所（バンコク）

#### 研修調査団構成

団長 千葉果弘（国際基督教大学教授、日本国際理解教育学会常任理事）

副団長 多田孝志（目白大学助教授、日本国際理解教育学会副会長）

団員 10名

◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様関わった文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がありましたら、学会にご寄贈ください。最近そのような資料を求めている方が増えております。学会の宣伝にもなりますのでお願いします。また、ニューズレターなどで会員にもお知らせしたいと思っております。その際、委託金をいただいている公文国際奨学財団にも送らせていただきたいと思いますので、2部お送りくださるようお願いいたします。

◆卒論・修論の紹介のお願い

近年、大学生や院生が国際理解教育関係の論文を発表することが多くなってきております。本会報でも卒論や修論を紹介したいと思っておりますので、氏名、論文名、学校名をお知らせ下さい。

◆住所・所属等変更の場合のお願い

最近事務局から郵送物を送りましても返却される場合が増えております。住所・所属等に変更がありましたら、ファックスまたは、Eメールでお知らせください。

◆事務局オープンの曜日のお知らせ

事務局は月曜日から金曜日の午前10時より午後5時までオープンしています。ご用の方はこの時間にご連絡下さい。なお、この他の曜日の場合でも毎日連絡が取れるようになっておりますので、留守番電話、ファックスまたはEメールでご連絡下さい。

◆名簿改定版のお知らせ

平成13年7月現在の会員名簿を同封します。

◆年会費納入のお願い

当学会の活動のすべては会員の皆様の会費でまかなわれております。年会費未納の会員は会費をお支払いくださるよう宜しくお願い致します。

正会員： 8,000円

学生会員： 3,000円

団体会員： 30,000円

・郵便振り込み

口座番号 00120-5-601555 (従来通り)

加入者名 日本国際理解教育学会

・銀行振り込み

三井住友銀行 金剛支店(194) 普通預金

口座番号 1223386

名義人 日本国際理解教育学会

◆事務局夏期休業のおしらせ

9月16日まで、事務局夏期休業いたします。しかし、週数回は事務局に出かけていますので、ご用の方は、留守番電話・FAX(072-365-8802)またはEメール(kokusaig@oak.ocn.ne.jp)にてご用件をお知らせ下さい。後日連絡をいたします。

予 告

日本国際理解教育学会  
第12回大会

2002年6月8日(土)、9日(日)

広島大学